

六 大内盛見の豊前進出

盛見幕府軍を破る

応永六年（一三九九）十二月、大内義弘が和泉堺に籠城して、壮烈な戦死を遂げる前、弟盛見は留守を守るよう遺言されて、防長本国に防戦体制を整えていた。一方、義弘に従って、堺の一方の堺を守っていた弟弘茂は、最後まで堅固を守り、守る覚悟であったが、老臣平井道助の説得によって降伏した。やがて義満は弘茂に防長二国の守護職を与えて、留守を預かる盛見を討伐させようとした。盛見は西より九州探題渋川満頼率いる九州勢と、北より弘茂率いる安芸・石見勢の侵入を受けて、難を豊後に避け、大友親世を頼った。大友親世は兄義弘の娘を妻とし、義弘と共に、今川了俊を讒訴した間柄であった。

盛見は、石見・九州の兵が防長から引き揚げると、豊前に侵入し、大友氏の豊後勢や豊前の兵をもって、応永八年十二月、長門に上陸し、弘茂を長府毘沙門堂の戦いで破り、ついで下山の戦いで弘茂を敗死させた。このころ、大友親世は幕府に逆らって大内盛見を支援するため、家督を兄氏継の子親著に譲ったと思われる。



大内盛見の花押



大友親世の花押

応永九年十二月十八日、九州探題と行動を共にしている大友親著が、佐田親景へ京都郡久保庄政所職を安堵している。宇都宮親景

は、このころより佐田氏を称しており、城井郷菅迫から宇佐郡佐田庄に居を移し、九州探題や大友親著に従って行動している。

豊前守護大内盛見

応永九年正月、盛見は山口へ入り、防長を掌握した。幕府は十年四月、大内四郎入道道通（満弘の弟）に、安芸・石見の武士をつけて盛見を討たせようとしたが敗れて、竈戸関で自殺した。盛見は安芸・石見に進撃して、介入道を支援した国衆を討伐した。この年、幕府は盛見と和睦し、防長二国守護職を安堵し、応永十四年四月までには、豊前国守護職をも与えたいらしい（『水上山奥』）。この間、応永十二年十一月ごろ、探題を支援する大内・

猪岳の戦い

大友両軍は少弐資頼軍を豊前鳥越城（宇佐郡安心院町）に破り、馬岳・香春一の岳・二の岳を攻略したが、猪岳において、大内方は長門国守護代陶尾張守弘長を戦死させたという（『肥前文書』『太宰府天満宮史料』）。猪岳は田川・仲津郡境というから飯岳＝大坂山（高さ五七三坪）のことであるうか。

大内義弘が滅び、盛見・弘茂兄弟が跡目争いを展開している間、豊前国守護職は少弐貞頼に与えられたらしい。しかし、探題満頼と対立して戦闘をやめなかったため、豊前守護職は一色加賀守満貞に与えられたのか、佐田親景は本領並びに京都郡蔭田庄、田川郡伊方庄、仲津郡元永村の安堵を受けている。佐田親景は、幕府小番衆として探題に従っていた。盛見は応永十四年四月には豊前国守護職を得ていたらしく、朝鮮に派遣した文書に「防長豊州刺史」と記している。

大内盛見の

豊前経営 応永十五年五月十八日付で、大内盛見の最初の史料を豊前国で見ることが出来る。宇佐宮領における人夫の催促を停止せよという命令が西郷右馬助・内藤肥州・杉霜台三人の連

名で、守護代杉伯耆守(重綱)にあてて出されている。大内家奉行人西郷右馬助は宇都宮一族ではないかと考えたが、周防国にも鎌倉時代以来、西郷氏がいるという(松岡久人「大内義隆」から、今後の研究にまちた。い。

大内盛見は、豊前入国に当たって、庄園本家・領家に対して、先例を尊重し、宇佐宮に対しては、神官・社僧の僉議を尊重した。しかし、所領の訴訟について、入り組み多く判断困難な場合は、闕所として大内氏被官に預け置き、機会をみて恩賞として宛行った。

大内氏は、一〇〇年近くも荒廃するに任せてきた宇佐宮や弥勒寺の復興に義弘以来、力を注ぎ、豊前国中の神領から取りたてた段銭を造替費用に充てた。応永二十五年八月、仲津郡中臣今男八町を宇佐宮一御殿定灯料所として寄進し、同年十二月の掟書では、国内の寺社領や武士知行地を問わず、造替人夫を徴発することなどを郡々の奉行人に触れ出させている(『小山田文書』)。郡々奉行人はやがて郡代と呼ばれるようになる。豊後の場合は、郷・庄ごとに政所を置いて、守護大友氏の命令を奉行人(加判衆)が政所役人に伝え執行させたが、大内氏は守護大内氏↓大内氏奉行衆↓守護代↓郡代↓地下代官という命令系統のもとに政治を行っていた。

宇佐宮寺の再興

応永三十四年八月、大内盛見の宇佐参宮があり、この時、弥勒寺金堂で千部法華経の転読が聖道五〇人、律僧五〇人・国分寺より一〇人計一一〇人で執り行われた(『到津文書補遺』)。

このころ、盛見は毎年のように参宮し、宮寺の整備に力を入れ、豊前の国人を警備に動員して宇佐宮と屋形盛見の威厳を高めていった。

応永三十二年七月、公方義持の絶大な信頼を得て在京していた大内盛

見は急遽、公方に暇乞いをして九州へ下向した。少弐満貞・菊池持朝と九州探題深川義俊とが交戦し、筑前国を占領したので、探題を支援するためであった。同年十月には、少弐一族の者二人を討ち取る戦果を挙げ、盛見の推挙で、義俊の猶子満直を九州探題とした。

筑前国の代

永享元年(一四二九)、再び少弐・菊池氏が挙兵し、探

官大内盛見と交戦したので、幕府は筑前国守護職を少弐氏から奪い、幕府の直轄国(御料国)とし、大内盛見をその代官とした。盛見が実質的に筑前国守護となったのである。永享二年、筑前国の公領年貢二〇万疋(二〇〇〇貫文)を送り、幕府を満足させた。

大内盛見敗死

この時、大友氏や少弐氏の鎌倉時代以来の領地を侵すことがあったらしく、永享三年二月、大内盛見と大

友持直の合戦が起こり、これに菊池・少弐両氏が大友持直を支援したから大合戦となり、五月、大内盛見は大友領の立花城以下の要害を攻略したが、六月二十八日、大友領の筑前怡土郡深江村萩原に追いつめられて自刃した。時あたかも、近畿一帯では、大規模な土一揆が蜂起して、幕府や荘園領主を脅かしていたから、筑前国の状態を「大友・菊池・少弐等、内々ハ土一揆同心風聞候歟、事六借様候」(『講義』)と噂した。恐らく、大内氏の力の政治に反発する筑前の国人が、大内・大友の戦間に便乗して各所で蜂起したものであろう(柳田快明「室町幕府権力の北九州支配」十五世紀前半の筑前国を中心に「九州大名の研究」所収)。

大友持直の ころして筑前国から大内勢は放逐され、豊前国でも、豊前国占領 守護代杉伯耆守重国が長門国へ逃亡したため、大友持直が豊前一国を占領し、数年間、豊前を支配することになり、筑前国も少弐氏によって治められた。

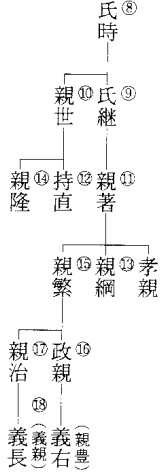
大友持直は使者を上洛させて、「幕府へ無二の忠節奉公をいたす気持

ちは変わりません。大内盛見が戦死するに至ったのは、無理をしたため、私の造意によるものではありません。筑前国の内、大友家が代々知行してきた所々を知行するだけでよいのです」と弁明させた。この結果、幕府は大友持直の本知行国は元のごとく承認し、大内氏も、豊前・筑前を従来通りとした。

七 大内持世と大友持直の対立

永享三年（一四三一）六月、大内盛見の戦死によって、筑前は少弐氏が、豊前は大友持直が領することになったのをみて、公方義教は菊池氏に筑後国守護職を与えて、大友持直を討たせようとした。これより以前、幕府は大友持直へ筑後半国を与え、前の守護菊池氏が去り渡さないため、一國全部を大友持直へ与えたから、大友・菊池両氏の交戦がつづいていたのである。また、大友持直と対立し、交戦をつづけ、肥後の菊池氏に匿かくわれていた大友左京亮親綱、同様に山に楯籠たてかごっていた大友親隆兩人に、安芸・石見の国人を加勢させて、持直を討伐させようとした。

大友氏略系図



大内盛見の跡目については、大内家雑掌内藤肥後入道智得が三宝院満濟に語ったことによると、周防国は新介持盛へ、長門国は刑部少輔持世へ、長門国一郡を中務大輔満世へ分配することを公方義教に承認してほしいと盛見が申し入れていたという。内藤智得は、新しく、長門・豊

前・筑前を持世へ、周防と安芸東西条を持盛へ、長門一郡と石見国二万郡を満世へ与えてほしいと申し入れ、公方義教の了解を得た。永享三年十月、公方義教は内藤智得の申し入れとは逆の決定を下した。すなわち、持世を惣領として、盛見の遺領を継がせ、弟持盛には長門国その他を与えた。

大内家の内紛

大内持世は早速筑前へ渡り、大友持直と合戦を始め、豊前でも、規矩郡に楯籠る大友持直の舎弟掃部助親雄および一族の挟間氏と対峙した。

永享四年（一四三二）二月、盛見戦死のころ、企救郡朽綱に在陣していた新介持盛は、幕府裁定に憤懣ふんげんやるかたなく、長門へ渡って持世方へ夜襲をかけた。持世はいったん長門の奥へ遁れ、さらに近くの石見国三隅城に籠城した。持盛は大友持直の支援を得て、豊前国を支配下に置き、周防国へ帰って、惣領の座についた。京都では、「遠国の事は、少々の事は上意の如くならずとも、よい程にゆるすことは、当御代ばかりではなく、尊氏のころからの政策であると伝承してきている」と、持盛の惣領を承認する動きが出てきた。ところが、持世はまもなく石見・安芸の軍勢を率いて山口に突入し、持盛を豊前へ奔らせた。持世は幕府が与えた持盛の領地を給うよう申請し、長門国と安芸東西条以下を得た。豊前へ通れた持盛は、大友持直の応援を得て、防長への侵入の機会を窺い、防長の国人への工作をすすめた。

豊前守護大内持世

京都では、大友親綱・同親隆と日田・佐伯・田原の幕府小番衆に命じて、大友持直・大内持盛を討たせようとした。また、安芸の毛利小法師・小早川弘景等をも、大内持世に合力させた。半年後、幕府は停止していた九州渡海を大内持世に許可し、安芸・石見・伊予三か国の武士に合力させ、また菊池持朝へ